

## マタイによる福音書4章「御国の宣教」

### 1A 悪魔の試み1-11

1B 御霊の導き 1-2

2B 御言葉による対抗 3-11

### 2A 宣教の始まり 12-25

1B ガリラヤへ 12-17

2B 弟子の呼び寄せ 18-22

3B 御国の福音 23-25

## 本文

マタイによる福音書4章を開いてください。私たちは前回、バプテスマのヨハネによる宣教を読みました。それは、「悔い改めなさい、天の御国が近づいたから」というものでした。神が王として治める国が近づいたので、あなたがたは自分中心の生活を改めて、神に立ち返りなさいということです。そしてそれが、その王であられるメシヤ、キリストが来られるための備えなのだということです。私たちも同じですね、これまで自分を王様にする国に住んでいましたが、キリストに生活や人生の座に着いていただいて、この方が支配される国の中に生きるということです。

ヨハネは、バプテスマを授けていました。バプテスマとは、「浸す」という意味です。水の中に浸すのですが、悔い改めというものに口ではなく、本当に自分を悔い改めの生活にふさわしく生きる、自分の罪に死に、神の命の中で生きるということでもあります。そして、ヨハネはサドカイ派やパリサイ派の宗教指導者に対して、アブラハムの子孫だから自動的に救われるのだと思ってはならない、火による裁きを免れることはできないと話しました。そして、これから来られる方が、聖霊と火によるバプテスマを授けると話したのです。聖霊のバプテスマは、イエス様がこれからの働きにおいて聖霊の助けを得て行なわれるのですが、同じようにイエスにつく者たちも聖霊の満たしを受けて働きを行なうのだということです。そして、火によるバプテスマとは神の火による裁き、神の御怒りをもろ受けるのだということです。

こうやって、今にでも主が火によって裁きを行なわれることをヨハネは説きましたが、イエス様は何とヨハネからバプテスマを受けようとされます。ヨハネが拒みますが、イエス様は今、正しいことをみな行なうことは良いのだと話されました。それでバプテスマを受けられます。すると御霊が鳩のようにして降り、そして天からの声がありました。「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。(3:17)」

今日は、ここから始まります。メシヤが来られました。そしてメシヤご自身が、神の子として、ま

た神に仕える僕として働きをされます。そこには、目に見える世界だけではなく、目に見えない世界、天使たちの世界が密接に関わっていることを知る必要があります。私たちの見ている世界は、目に見えない神によって造られ、そして神が目に見える世界のみならず、天使などの、私たちが普段は目で見ることのできないものが深く関わっているのだということです。神がこの世界を造られて、アダムとエバを造られたのに、なぜかそこに蛇がエバに語りかけ、それで惑わしを受け、アダムも罪を犯しました。神に仕える天使もいますが、神に逆らい、神のなされようとしていることに真っ向から対立して、反対する墮落した天使の勢力もいるのです。悪魔であり、その手下である悪霊どもの仕業があります。パウロは話しました、「御父は、私たちが暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。(コロサイ 1:13)」悪魔の支配から救い出されて、愛する御子の支配に移して下さったということは、自分の支配から私たちが奪い取られたということになります。そのために、何とかして破壊しようとするのです。

キリストご自身が、神の働きの中に入る時に悪魔の反対を受けました。それが、4章の始まりです。そしてキリストが、悪魔の誘惑を受けられたということは、誘惑を受けている者たちに同情することができ、そして力づけることがおできになるということです。私たちが誘惑を受けている時に、そこにはイエス様がおられるのだと思い出す必要があります。

#### 1A 悪魔の試み1-11

#### 1B 御霊の導き 1-2

1 さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。2 そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。

バプテスマをヨルダン川でお受けになって、「御霊に導かれて」荒野に行かれたとあります。午前礼拝でも話しましたが、鳩のように降りて来て、上に留まれた御霊が、なんと悪魔の試みを受けるように導かれたのです。主は本当に大きな方です、私たちが試みを受けている時に、主が大きな愛の御手で私たちを支えておられることを知ることができます。

そして、「荒野」であります、ユダヤの荒野です。ヨルダン川を出て行かれたら、すぐ近くにエリコの町があります。その周辺は荒野です。荒野は、聖書ではいろいろなことが起こっていて、そこには意味があります。一つは、荒野に声がするとイザヤが預言したように、そこで神の声を聴くことができる場所です。そしてその反対に、悪霊どもが活動しているところでも登場します。神の命の水が全く無いところであり、悪霊どもが住み着いていることを、黙示録 18 章 2 節で御使いが叫んでいます。私たちにも、そういった経験があるでしょう。荒野という苛酷な状況、そこで悪魔が強く誘惑して来るような状況です。

そして、「四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。」であります、午前礼拝で話し

したように、断食は途中で、空腹を覚えなくなる時がきます。体が空腹を感じさせないように機能するのです。けれども次に空腹を覚える時に、その時は食べないと餓死してしまいます。ですから、イエス様が今、受けている誘惑は生死をさまようようなものであったに違いありません。

ところで、「四十日四十夜」であります。イエス様が、ユダヤ人たちのため、イスラエルのために来られたことを思い出してください。イスラエル人たちと一つになるために、幼子の時にエジプトに逃れ、そこからユダヤに戻ってこられました。ここでも、同じ働きをしておられます。四十という数字ですが、四十年という期間がありますね。そうです、荒野の旅です。イスラエルは、四十年間、荒野において放浪しました。そしてもう一つは、イスラエルをエジプトから救った指導者、モーセが、シナイ山において律法を受ける時に、「四十日四十夜、主とともにいた。彼はパンも食わず、水も飲まなかった。(出エジプト 34:28)」とあります。四十年間の荒野の旅とも重なるし、モーセの四十日間の断食とも重なります。

## 2B 御言葉による対抗 3-11

3 すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」

ここにある「あなたが神の子なら」という言葉は、もっと正確には「あなたが神の子ならば」というものです。イエス様は、バプテスマを受けられた時に「これはわたしの愛する子」と父なる神から呼ばれました。イエス様は、神に愛される独り子であり、神から全てのものを任されておられ、神ご自身です。そうであるならば、「この石がパンになるように、命じなさい。」と悪魔は言っています。ところで、「悪魔」という言葉の意味は中傷者です。今、イエス様が石をパンに変えることもできないのなら、あなたは神の子なのか？とそしっているのです。悪魔は絶えず、「あなたは、キリスト者であるといいながら、こんな力しかないのか？」とそしっています。祭司長たちが、イエス様が十字架に付けられていた時に、「彼は神に投げ頼んでいる。神のお気に入りなら、今、救い出してもらえ。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。(27:43)」と罵りましたが、それはまさにサタンに感化された言葉と言ってよいでしょう。

どうでしょうか？イエス様は、ご自分を罵っている者たちにその全能の力を使えば、一瞬のうちに天から火を降らせて滅ぼすことができになります。いいえ、イエス様はそのようにご自分の怒りの思いでその力を持っているのではなく、あくまでも父なる神の御心を行なうため、父なる神に栄光を与えるために、任された御力を用いられます。そのことと、ここは同じです。イエス様は、石をパンに変えることは、御子としていとも簡単にすることがおできにあります。神は、バプテスマのヨハネが言ったように、石ころからでもアブラハムの子孫を造ることができるのですから。しかし、父なる神から与えられた力を、自分の肉の欲求のために使うべきなのではないでしょうか？いいえ、違います。自分の欲求のために与えられた力を使うこと、これは悪魔の仕業です。

ところで、エバはこの領域で惑わされ、禁じられた実を食べました。「その木は食べるのによさそうで(創世 3:6)」とあります。ここで大事なのは、その食欲自体が間違っているということではないです。神の命令、霊的なこと以上に肉体の欲求を用いる、あるいは肉の欲のために、神から与えられた賜物を使うということが間違っているということです。

4 イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」

午前礼拝でお話したように、神の言葉で生きることが肉体の欲求にまさるのです。イエス様は、神のことばによって対抗されましたが、私たちもそれを手本とすべきです。霊の戦いにおいて、パウロは、御言葉は御霊の剣であると言いました(エペソ 6 章)。神のことばによって生きることによって、たとえそれが肉的に激しい葛藤があっても、それでも御霊によって神の言葉を選びとります。

さらに、イエス様は三つの誘惑のうち、どの誘惑においても、申命記からの言葉を引用されています。この 4 節は申命 8 章 3 節、7 節は申命 6 章 16 節、10 節は 6 章 13 節です。それはやはり、イエス様がイスラエルの民と一体になるためです。モーセが最後に、イスラエルの民に語ったのが申命記です。そこに書かれている、神の命令に従えば祝福され、背けば呪いがあると宣言しました。イエス様が今、彼らが不従順のため呪いを受けてしまっている部分を補うかのように、その律法の言葉に聞き従っておられるのです。私たちに対しても同じです、私たちの主は、私たち血肉の弱さのゆえに行なえなくなっているところにおられて、その弱さと共におられて、その弱さの中で私たちを恵みによって強くしてくださいます。

そして申命記から、イエス様が引用されたということは、次に申命記の言葉も意識されていたことでしょう。「8:2 あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。」荒野の旅において、主が確かにイスラエルの民がご自分の言葉によって生きるかどうか確かめていた、試しておられたということです。同じように今、イスラエルのメシヤ、イエスご自身が荒野において、主の言葉に拠り頼むかどうか試されていると言ってよいでしょう。

5 すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、6 言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから。」

「聖なる都」とは、神殿の建てられているエルサレムのことです。神がそこをご自分の都と定められました。その神殿の頂から、神の子として公にその力を示したらよいではないか？と誘っている

のです。そんなこともできないのですか、もっと人々の前で目立つようなことをして、それで認められることができるではないですか？と悪魔は唆しているのです。人に認められて、目立ってどうするのでしょうか？神に認められる人になりたいですね。

そして「**神殿の頂**」であります。神殿の敷地を支える擁壁の南東の角のてっぺんのことです。その真下にはケデロンの谷があります。ですから、そこから落ちることは、その谷の下まで転げ落ちていくことであり、まさにサーカスやスタントマンが高い所から飛び降りるような行為です。



そして、この誘惑をするために悪魔は、神の御言葉、詩篇からの引用までしています。「主が、あなたのために御使いたちに命じて、あなたのすべての道で、あなたを守られるからだ。(詩篇 91:11)」とあります。イスラエルが荒野の旅において、危険な道があるけれどもそれでも、主が危険から守ってくださる、御使いも送ってくださるという意味です。しかしここでは、御使いたちがイエス様を支えるように神にさせることができるだろう、試すことができるだろうと誘っています。

ところで、このような欲、世の欲を「**目の欲**」と言います。先は肉体の欲求に関わることですが、ここでは「**目の欲**」です。これもエバが、蛇から惑わされたことです。その木は、「**目に慕わしく**(創世 3:6)」とあります。私たちは目に見えるものに弱いので、それで惑わされます。

7 イエスは言われた。「『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある。」

イスラエルの民が、荒野で喉が渇いて、それでモーセと争い、マナは飽き飽きしたと言って主を試しました。私たちにも、この誘惑があります。自分のやりたいことがあって、それを満たすために、神に要求するのです。そうすれば、神が神ではなく僕になってしまいます。私たちが神に命じて、神が言うことを聞くのでしょうか？本末転倒です、神が私たちに命じて、私たちが従うのです。「こう

やれば、うまくいくのに。」という哲学は人間の考えであり、悪魔から来ています。神と人を逆転させる教えだからです。

8 今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、9 言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」

御言葉まで使ってイエス様を揺るがそうしていますが、それに応じないので正体を見せます。まず、「非常に高い山」に連れて行きます。おそらくは、エリコのそばにあるユダヤの荒野の山かもしれません。今、誘惑の山としてエリコの町からケーブルカーで上ることができますが、そこから当時間も栄えていたエリコの町を眺めることができました。それを見せて、幻の中なのでしょうか、すべての国々の栄華を見せたのです。

そして、「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」と言っています。悪魔は、これを言うことができました。なぜなら、事実、アダムが罪を犯した時以来、地を支配せよと神が言われた人に与えられた力が、悪魔のものとなってしまったからです。コリント第二 4 章 4 節に、「この世の神」とあります。使徒ヨハネは、「全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。(1ヨハネ 5:19)」と教えました。けれども、イエス様こそが神の御子であり、この方がすべてのものを相続される方です。世界を神のものにするために、ご自分は来られました。ところが、たった今、悪魔から「どうぞ、もらってください」と誘われているのです。

しかし、午前礼拝で話しましたように、イエス様はこの世を神のものとするために、ご自分の命を代価にすることによって買い戻すことになっていました。すなわち、神の御子であるにも関わらず、人の姿を取って仕え、十字架に至るまで父なる神に従順になることが、道でした。ですから、その道を妨げるものは悪魔です。ペテロは、イエス様が十字架に付けられ、三日目に甦ることを話された時に、イエス様を脇にお連れして、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません。」と諫めた時に、イエス様は、「下がれ、サタン。あなたは、わたしをつまずかせるものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。(16:23)」と言われたのです。ペテロはイエス様のことを誠実に思ったのです、けれども神なしで思うことは、サタンからの触発さえあるということです。キリスト者も同じです、イエス様は「自分を捨てて、日々、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」と言われました。主から言われたこと、それがローマの主権のように、自分を束縛するようなことであっても、神の御心であると信じて、行なうのです。

御子が父なる神から全てのものを任されているように、キリストにある者たちも神から力や権威が任されます。それを主に従う中で用いるのではなく、それをまさに自分のものであると錯覚して受け入れてしまうなら、それはサタンの罠そのものであります。ネブカデネザルが、バビロンの栄光を自分のものだとして、獣のようにされました。アッシリヤが自分の力で国々を倒したのだと誇っ

て、エルサレムを包囲している時に十八万五千人が一夜にして打たれました。エバが蛇から受けた感わしが、「またその木は賢くしてくれそうで好ましかった」とあります(創世 3:6)。「神のようになって善悪を知る者となる」と蛇が言ったからです。使徒ヨハネは、これを「暮らし向きの自慢」と呼びましたが、訳としては「高ぶり」と言った方がよいでしょう、いわゆるプライドです。(1ヨハネ 2:16)

10 イエスは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」

主を礼拝し、主にだけ仕えるということが、実はどれだけの戦いであり、葛藤であるのか知らないといけません。多くの場合、逆になるからです。自分のために神が生きてほしい、自分が神で神がしもべだ、ということになるのです。私たちの目的は、「うまく行くから」というものであってはいけません。あくまでも、「主に言われているから」という理由なのです。主が命じ、主を恐れ、主に仕えます。

世界の国々の栄華を悪魔が見せて、それでサタンに額づく人物がこの世に現れます。反キリスト、獣です。「竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた。(黙示 13:2)」今も、この反キリストの霊が働いています。私たちに与えられている御霊は、私たちがキリストと同じ、へりくだることを教えますが、反キリストは自分を高める、自分が認められる、自分が人々を操作するという仕業を、巧妙な手口でしかけます。

11 すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた。

とてつもない霊の戦いにおいて、イエス様は肉体の疲れ以上の、激しい霊における疲れを覚えておられたはずです。そこに御使いが来て、イエス様に仕えました。肉体の上でも、もしかしたら水やパンも用意したかもしれませんが、霊的な助けでありましょう。

イエス様の誕生においても、御使いが大変活発に動き、そして悪魔もヘロデを通してイエス様を殺そうとしました。今ここで、宣教の働きに入ろうとされている時に、悪魔は何とかしてイエス様の働きを台無しにしようとして、攻撃をしかけました。ダニエル書 10 章には、御使いたちと、そして反対する墮落した天使ども、ペルシヤの君であるとか、ギリシヤの君がでてきますが、御使いたちがダニエルを力づけます。このような戦いの興亡があります。そして今、悪魔は退きましたが、休戦しただけです。悪霊どもを通してあらゆる戦いをしますが、最たるものは十字架への道です。闇の力であり、サタンの攻撃です。

## **2A 宣教の始まり 12-25**

そしてイエス様は、宣教を開始されます。

## 1B ガリラヤへ 12-17

12 ヨハネが捕えられたと聞いてイエスは、ガリラヤへ立ちのかれた。

イエス様は、この時にどのようなことを思っておられたのでしょうか？考えられるのは二つです。一つは、ご自身が捕えられ、殺されるということでしょう。ヨハネはヘロデ・アンティパスによって捕えられます。そして、彼の不法の妻ヘロデヤの唆しによって斬首の刑を受けます。神の道を伝えている者がそうなるのなら、神の御子ご自身もそうなるということです。

もう一つは、「ヨハネの宣教から引き継ぎをする」ということです。「ガリラヤへ立ちのかれた」とります。それまではユダヤの荒野にいたり、エルサレムに行かれたり、ヨハネの福音書にガリラヤに行かれる前のイエス様の活動が記されていますが、ヨハネが捕えられたことによって、ヨハネの働きを受け継ぐような形で、ガリラヤに向かわれたのです。イエス様は、決してヨハネの働きから離れてご自分の働きを行なわれませんでした。なぜなら、それこそが父なる神の御心だからです。ヨハネは先駆者であり、イエス様が主ご自身です。ヨハネは主の道備えを人々に与えたのですから、そこから主ご自身が入らなければいけません。人々が悔い改めている中で、ご自身の恵みの言葉を語らなければいけなかったのです。

私たちも、人々を通して働かれる神を信じているならば、ある人が種を蒔いたところで他の人がそれを育て、またある人が刈り取りをするということです。私たちの教会も、ここは十年ぐらいまで教会がありました。そして私たちを神がここに置いておられるということは、今度は次の人々にも受け継ぐのかもしれませんが、主が人々の心を備え、そしてキリストの恵みが伝わります。

13 そしてナザレを去って、カペナウムに来て住まわれた。ゼブルンとナフタリとの境にある、湖のほとりの町である。

イエス様は、ナザレで育ちました。けれども、カペナウムに移ります。そして、カペナウムを拠点として宣教を開始されます。イスラエル十二部族の割り当て地としては、ナザレはゼブルンの地、そしてカペナウムがナフタリの地です。「カペナウム」は、「ナホムの村」という意味です。それが預言者ナホムのことを意味するかどうか分かりませんが、慰めという意味がありますね。

14 これは、預言者イザヤを通して言われた事が、成就するためであった。すなわち、15「ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。16 暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。」

イエス様がカペナウムに動かされたのは、イザヤの預言があったからでした。この箇所は、アッシリヤがイスラエルの地を攻めて来て、北イスラエルが滅び、民が捕え移されていくその悪夢を預

言して、しかしその異邦人の支配の中にあっても、それでもメシヤがそこに来て彼らの光となってくださるという背景の中で語られています。アッシリヤのものとなり、それからバビロン、そしてペルシヤ、それからローマの支配下に入ります。異邦人の抑圧的な支配が強いという意味合いがあるでしょう。それでここが、「暗やみ」また「死の地と死の陰」と表現されているのです。そして、ユダヤ人が自分たちの神をあがめているエルサレムとは違い、異教の影響が強いので、同じユダヤ人から蔑まれている面もありました。

そしてガリラヤ地方は、昔から大したことのないところとして旧約聖書の中で語られています。ソロモンが、宮殿や神殿を建てるのに貢献したツロの王ヒラムに、ガリラヤの地方の二重の町を与えたのですが、ヒラムが「兄弟よ。あなたが私に下さったこの町々は、いったい何ですか。」と言った、とあります(1列王 9:13)。要は、大したことのない土地だったのです。しかし、主なる神はそこをメシヤが光として輝くところとして選ばれました。イエス様は、山上の説教で「あなたがたは世界の光だ」と言われます。光であるキリストを持っているならば、そのことによって暗き世界に光として輝くことができます。

ところで、ガリラヤが「湖に向かう道」とありますが、それは「海沿いの道」です。これはローマ時代は、「ヴィア・マリス」と呼ばれていたもので、エジプトから地中海沿いに北上、途中、イズレエル平野のところまでギドを通り、内陸に入ります。そして再び北上し、カペナウム経由で、ダマスコへ向かいます。つまり、エジプトとユーフラテス川の町を結ぶ国際幹線でありました。そして、ですからカペナウムに取税人マタイがいましたが、徴税をする要所がカペナウムにあったからでしょう。そして、ガリラヤ湖畔の町ですが、漁業が発達していました。それから周りは異邦人の町々があります。ガリラヤ湖の東岸は、デカポリスであり、ギリシヤ時代から異邦人の町々です。マグダラのマリヤの町、マグダラも、漁業が盛んでユダヤ人が多く住んでいましたが、周りが異邦人に取り囲まれていました。

したがって、田舎であり、なんでもないガリラヤ地方でありながら、それでも通商の要所となっていたところであり、異邦人もいるようなところでした。ここにイエス様が来られたというのは、戦略的でありました。主は、エルサレムの宗教指導者の監視もそれほど感じることもなく、またヘロデの監視も比較的薄く、比較的、宣教活動が自由にできたことでしょう。また、将来的に異邦人への宣教も御霊によって、使徒たちにとって行なわれていきます。

17 この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

イエス様は、バプテスマのヨハネと同じ言葉をもって宣教を始められました。そうです、イエス様はヨハネの宣教の続きとして、ご自分の働きをされています。けれども、ヨハネは先駆者でありま

すが、イエス様は主ご自身です。天の御国は、イエス様の宣教の中で実質のものとして現れます。

## 2B 弟子の呼び寄せ 18-22

18 イエスがガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、ふたりの兄弟、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレをご覧になった。彼らは湖で網を打っていた。漁師だったからである。19 イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」  
20 彼らはすぐに網を捨てて従った。

イエス様は、宣教の働きを行なわれるにあたって、弟子たちを呼び寄せました。その初めの弟子たちは、四人です。ペテロとアンデレ、そしてヤコブとヨハネです。イエス様は御国の福音を語られます。神の国において、十二使徒が教える主ご自身がその中心であり、十二使徒がイスラエルを治めることによって神の国が成り立ちます。かつて、十二部族がいたように、十二使徒が回復するイスラエルで治めます(マタイ 19:28)。主はそして、このような小さき者たちにも神の国をお任せになり、将来、主から割り当てられたものを治めることになるのです。

そして、宣教の働きというのは、チームであることが分かります。イエス様はご自分独りで働きをなさませんでした。ご自分独りで行なうことはでき、また弟子たちは力ない、欠陥だらけの者たちであっても、それでもイエス様はチームで働きをされることを選ばれました。それが神のスタイル、御心だからです。そして使徒たちが、使徒行伝において「一行」という言葉が使われていますし、「私たち」という言葉も使われています。もちろん伝道者ピリポのように、一人が遣わされることもあるでしょう、けれども教会の権威の中で複数名が共に動く時に、そこに神の御心が多分にあるのです。

ここでは、「ふたりの兄弟、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ」が出ています。彼らの特徴は、漁の仕事をしていたということです。ヨハネの福音書1章によれば、ペテロとアンデレ、また次に出て来るヤコブとヨハネは、みながバプテスマのヨハネの弟子であったことが分かります。ところで、「弟子」というのは、ただ教えを受けるだけではないのです。共に時間を過ごす人々です。「付いて行きなさい」とイエス様が言われているのであって、ただ「聞きなさい」ではないのです。主のところにいる、そのそばにいたということが味噌です。そして、その教えを学ぶだけでなく、ラビのようになることが目的です。当時、ユダヤ教のラビがいて、そのラビのところの弟子となって共に生活をしていました。これらの弟子も、そのようにしてバプテスマのヨハネと共に過ごしていましたが、けれども漁の仕事もありますから、いわばパートタイムでやっていたのです。しかしイエス様を見て、ヨハネが彼こそが神の小羊と呼んだので、それで彼らはイエス様のほうに付いて行ったのです。

けれども、今ここで、彼らはフルタイムで主と世生活を共にすることになります。それで、「すぐに網を捨てて従った」とあります。ルカ 5 章にある、大漁の奇跡を見たからでしょう。これは強烈でし

た、自分たちが圧倒的に罪深いことをしり、無力を知り、それでイエス様によって、今度は人の魂の漁師になると言われて呼ばれました。しかし、イエス様の復活後も、ペテロは漁に戻って行ってしまいます。つまり、彼の献身、イエス様についていくというのには、段階があり、時があったということです。皆さんも、ご自身が主に仕えることについての献身があります。その深みについては、それぞれが主に語られているところがあります。そこから、主に呼ばれて、主から学び、主に付いていく働きに入っていくのです。これから、私たちは弟子たちの生活を見て行きます。自分が捨てた分、イエス様が身近になり、イエス様が全てを備えてくださることを経験します。

21 そこからなお行かれると、イエスは、別のふたりの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父ゼベダイといっしょに舟の中で網を繕っているのをご覧になり、ふたりをお呼びになった。

22 彼らはすぐに舟も父も残してイエスに従った。

もう一つの兄弟二人がいます。ヤコブとヨハネです、ヤコブは使徒 10 章で、ヘロデ・アグリッパ一世によって殺されてしまいます。ヨハネはもちろん、使徒ヨハネになる人です。彼らも漁師でした。「舟の中で網を繕っている」とありますが、ここの「繕う」とは修繕するということです。そして、彼らもすぐにイエス様に従いますが、ここでは、「父も残して」という言葉があります。父を敬わないということではありません、けれども、父以上にイエス様が自分の主となっているという、強烈な献身と忠誠です。キリスト者がイエス様に呼ばれると言うことはこういうことです、誰につくのもなくイエス様につきます。そしてその強烈な献身と忠誠の中で、一致が生まれます。先の「繕う」のギリシヤ語は、コリント第一 1 章 10 節で「完全に一致する」という言葉に使われています。

### 3B 御国の福音 23-25

23 イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいを直された。

「ガリラヤ全土」を巡られました。そこには、204 の町と村があったと言われています。人口は一万五千人より多くいたと言われています。かなりの精力的な働きをイエス様は行われていました。会堂で教えておられますが、ユダヤ教の会堂は当時のものが、土台ですがカペナウム、そしてマグダラ、そしてガリラヤ湖の南西のところにも、なんと日本の天理大学の考古学チームが発掘しました。

イエス様が行なわれたのは、第一に「教える」ことでした。会堂であります、これは「集まる」という意味です。ユダヤ人が神殿を破壊されて以降、離散の地でも律法の朗読によって礼拝を持つことができるようにしました。そしてどこにおいても会堂をユダヤ人が成人男子が十人以上いるところには持つことができたので、彼らの共同体にはシナゴグができるようになり、共同体生活を支えていました。イエス様は、そういったところにつて「教えた」のです。これは、忍耐に在る作業で

す。使徒の働きを見れば、使徒たちはこのやり方を踏襲しています。教えることは、腰を据えて行なっています。そのことによって、私たちに神のご計画の全体が明らかにされていきます。信仰が、キリストのうちに建て上げられます。私たちの教会では、日曜礼拝の他に、火曜夜の聖書の学び、水曜昼の平日礼拝でも行なっています。オリーブの会も、ある意味、聖書から教えを受ける時です。

そして、「御国の福音を宣べ伝え」とあります。宣べ伝えるのは、宣言することです。主の真理を語り告げることです。福音の真理を説明するのではありません、主ご自身の言葉が人々の心を、聖霊によって変えるのです。そして、聞いている人が決断を迫られます。その言葉を聞いて受け入れ、信じるか、拒んで心を頑なにするかどちらかです。そして、「民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいを直された」とあります。人々を癒す働きです。使徒たちも、数多くの人々を癒しました。そして、ヤコブ書などにも、オリーブ油をぬって、長老たちに祈ってもらいなさいとあります。私たちの間に働く聖霊によって、祈りの中で霊的にも、また肉体においても癒しを受けます。また慈善行為も、具体的な生活に愛をもって関わることによって、それも宣教の一部です。

ところで、ここで「御国の福音」と呼んでいます。もちろん、この時点ではイエス様は十字架に付けられることを話しているわけでは、全くありません。前回お話したように、これは神が王となること、その支配によってエルサレムが慰めを受けることというイザヤ書 40 章の言葉があります、それが良き知らせ、福音であるということです。私たちのところに、キリストが主として王となっているという支配が広がれば、そこがすなわち御国であります。私たちは、御国の広がりの一部を担っています。この教会で、そして諸教会で、世界の教会でそうであります。そしてキリストが再臨され、地上にキリスト御国が確立します。

24 イエスのうわさはシリア全体に広まった。それで、人々は、さまざまの病気と痛みと苦しむ病人、悪霊につかれた人、てんかん持ちや、中風の者などをみな、みもとに連れて来た。イエスは彼らをお直しになった。

ここの「シリア全体」というのは、ガリラヤ湖の北東、今のゴラン高原とまたその以北であると思われれます。イエス様の働きがまず、ヘロデ・ピリポの統治するこの地域、さらにはイスラエルの境を越えて広がっていったということです。主が癒されるという噂が一举に広がりました。そして、「悪霊につかれた人、てんかん持ちや、中風の者など」とありますが、これは囚われた人々であり、イザヤが預言した人々であります。「捕われ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年(61:1)」ですから、メシヤの国が、病が癒されるということ、また悪霊から解放されることによって、リアルに、生々しくその到来を彼らは経験していったのです。彼らにとっては、それはあまりにも具体的であり、現実であり、主が生きておられ、主キリストの国が今自分たちにやって来たということを喜んでいるのです。

25 こうしてガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤおよびヨルダンの向こう岸から大ぜいの群衆がイエスにつき従った。

初めは、シリア方面に拡がって行って、それからガリラヤから人々がやってきます。遠い人が、近くにいる人々より早く来たのですね。そしてデカポリスですが、そこはギリシヤ時代からの十の都市と言われていたところで、異邦人が濃厚の地域です。そしてバプテスマのヨハネが影響を与えていた、エルサレム、ユダヤ、ヨルダンの向こう岸つまりペレヤ地方にからも、大勢の人々が集まってきました。

このように、御国の福音は、悪霊をも制するということから、その権威と力が現れて、その言葉が立証されていったのです。そして次は山上の説教ですが、弟子たちや群衆は驚きます。イエス様が、他のラビとは違って権威をもって語られました。ラビたちは言葉だけの解釈をしていたところ、イエス様は力をもって、実質をもって、権威をもって御国を宣言していかれるからです。

私たちには、霊の戦いがあります。悪魔の激しい抵抗があります。誘惑があります。しかしイエス様が付いておられます。そして私たちの福音、神の福音は力があります。悪霊や悪魔を制することができます。実体があります、御霊が働かれます。言葉遊びではなく、人々が事実、変えられるのです。そして、弟子たちはイエス様に献身するので、建て上げられる、一つに結ばれます。